

ラジオの時報のSE

藤田 赤目

ラジオの時報のSEが必要な舞台作品がありました。頭に浮かぶのは、「ポッ・ポッ・ポッ・ポーン」です。

場面は1945年（昭20）8月15日の正午。時報に続いて玉音放送が流れるという設定です。

実際の玉音放送では、時報に続いてアナウンサー（当時は放送員と称した）の「只今より重大なる放送があります。全国聴取者の皆様ご起立を願います。重大発表であります」、さらに下村宏情報局総裁の「天皇陛下におかせられましては全国民に対し、畏くも御自ら大詔を宣らせ給う事になりました。これより謹みて玉音をお送り申します」、そしてさらに「君が代」のレコード演奏の後、昭和天皇が読み上げた「終戦の詔書」の録音（音盤）が流れました。途中は省略しました。

当時の時報音がはたして「ポッ・ポッ・ポッ・ポーン」なのか調べました。

結論を先に述べると近年のものとは違い、自動時報装置により発せられたピアノの音でした。

この装置は、1933年（昭8）元日正午から運用が開始されたもので、東京中央放送局技術部の加藤倉吉が3年掛かりで開発した、大変大掛かりなものです（図1参照）。

時刻の元は、東京無線電信局の発する日本



【図0】放送局型第123号受信機

（『ラジオの技術・産業の百年史』2020より）

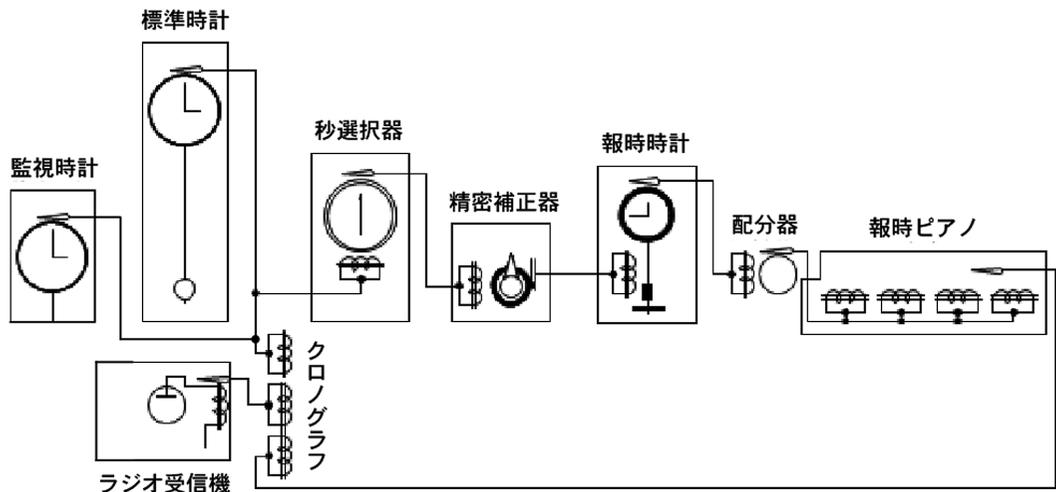
標準時です。内幸町にあった放送会館地下の恒温室内（31.0℃）に設置された振子時計が、これにより較正されて時を刻みました。

「カチ・カチ・カチ」というモールス電信用サウンダー（図2）の発する秒音に続いて、電動ハンマーがピアノ弦を叩いて合図音を鳴らします。これらをマイクロホンで収音して放送しました。

ピアノはアップライト型を改造したもので、報時ピアノと呼ばれました。

当初は聴取者の時計の時刻合わせの便宜を図るために、40秒前に開始され、10秒ごとにA音（108.75Hz／217.5Hzの和音）がそれぞれ3回、2回、1回鳴り、正時にA音（435Hz）が鳴りました（図3参照）。

A音にしたのは、楽器の調律に供する意図で



【図1】時報装置 系統図



【図2】電信用サウンダー (大正15)

した。ピッチは直ぐに110Hz/220Hz/440Hzに直されました。

初期は正午と放送終了時の21時半頃の2回報じられました。「頃」というのは、日によってまちまちだったためです。

21時半の時報の後には、「只今お知らせしました時刻は、9時30分でございます。以上

で本日の放送は終わりました。では、どなた様もご機嫌よくお休みくださいませ。さようなら」と放送員の声が続きました。

昭和13年には午前7時が、翌々年には午後7時が追加され、以降1日の時報の回数が徐々に増えるとともに、「40秒前」が10秒刻みで短くなっていき、終戦を迎える頃には「10



【図4】『まるは食堂2024』（作/演出:佃典彦）

日本人の時間意識は「刻（とき）」から「時（じ）」へ、「分」から「秒」へと細かくなりました。「秒」の概念の定着は、「現代」の形成に必要な要件の一つと考えられます。

1945年（昭和20）12月1日からは、ピアノ弦が音叉に改められ、毎正時の放送となります。そして1950年（昭和25）から、現在の4点鐘（3秒前）になり、発音が1オクターブ上って、

440Hz／880Hzになりました。

この装置は1960年（昭35）に水晶時計を使ったものに替わるまで使用されました。

玉音放送の時報は10秒前からで、正時に440Hzのピアノ音が鳴るのが“正解”ということで、SEを作りました。10秒という時間は、俳優たちがラジオの前に整列するのに丁度いい長さでした。

● 「時報装置の誕生」

NHKアーカイブスにこの動画があります。

大いに参考になりましたが、時間が狂っています。"秒間"が0.9秒を下回っている上に、間隔が一定していません。装置ではなく録画の問題と思われます。補正するとA音は435Hzに近いです。

→ https://www2.nhk.or.jp/archives/movies/?id=D0009060027_00000

● 参考資料

「ラジオに依る時報装置に就て」加藤倉吉『科学器械』1934年6月号 工政會出版部

「時報の歴史」加藤倉吉『日本放送史上』日本放送出版協会 1965

『ラジオの時代』竹山昭子 世界思想社 2002